

象徴性の終焉

— *Jude the Obscure* における死の過剰をめぐる —

安藤和弘

That complete mutual understanding, in which every glance and movement was as effectual as speech for conveying intelligence between them, made them almost the two parts of a single whole. (360-61)¹⁾

二人はまるで一つの人格を構成する分身のようである——こういう記述を読めば、JudeとSueが互いに惹かれ合うのも、何処かへ失われてしまった“single whole”を憧れる、宿命と言うべき愛の導きのためかもしれない、と読者は感じるかもしれない。JudeとSueの関係について、共有された同一性——過去、幸福な結婚に恵まれることのない家系という特異な、特異に迷信を呼ぶ血の共有を根拠に想定される、孤立的な結びつき——が非人称の語り手あるいは登場人物の言葉で時々示唆され、読者は次第次第に二人を重ね合わせて見るようになる。例えば、Christminsterへやって来て、初めてSueの生の声を聴くときにJudeは、その声音のうちに自分の声と同質の何かの刻印されているのを認めるのだが、それには何か必然性があるという感覚が生じることになる。JudeとSueはただ似ているというばかりか、二人の類似は必然であるという感覚が、それじたい、その類似を強化するばかりか、あるいはその類似をそもそも生み出しているのではないかとさえ感じさせるのである。物語の始まりから示唆される二人の同一性には、特異な「過剰分」がある。あるいは翻って、その過剰そのものが二人の同一性の顕著な特徴であると言ってもいい。

JudeとSueをテキストが記す以上に重ね合わせて見てしまうのには、実は、自然な根拠がある。Sueが物語の舞台に姿を現すのは第二部だが、それに先立って早々に読者は、Judeには彼に似て本好きな従妹がいるということを知り、Drusillaの口から知らされており(1.ii)、このことは、SueをJudeとの関係においてどう定位するかという問題について、読者は物語の初めから予め強い示唆を受けていることを意味する。²⁾ここで強い示唆というのは、Drusillaの閉

じぬ口が発効するゴシップの真理の効果を指示する。JudeとSueの関係をどう捉えるか——その手掛かりの最初の、そしてある意味ではそれゆえに不可避かつ決定的な枠組みを提供しているのがDrusillaのとりとめもないおしゃべりだというのは、看過されてはならない重要な点である。少年Judeが没頭していく古典のすぐれて書記言語の世界(音声を失った沈黙の世界)、壁に閉ざされた学問の世界と対置すると、Drusillaのゴシップの空間は、音声言語に固有の直接性に裏づけられて無媒介に展延し、語る声の真理を民主的に敷衍するという、特権的な力を付与されているかに見えるからである。読者は、物語の初めから、Drusillaが浸透させるゴシップに呪縛され、そこから脱することができないからこそ、(例えば冒頭に引用した)血縁関係に淵源すると想定される同一性を敷衍する類いの言葉を、ゴシップの信憑性が既に自明として強制する一定の解釈の枠組みの中で、自然に受け取ってしまいがちなのである。Judeじしんもちろん、自分とSueの関係について、Sueの幼少時代を知っているこの大伯母に呪縛されている。この老女が幼いSueを回想して語る時、その言葉は二重の響きを持ってJudeにつきまとう。例えば、彼とSueは子供時代に共通して幻覚のようなものを見る悪い癖があったということ、Judeは昔を回想するDrusillaの口から聞かされる場面がある(II.vi)。幻覚と言え——、Judeが初めて見た夕日に輝くChristminsterは、夢と祈りが見せた幻覚ではなかったであろうか。“Perhaps if he prayed, the wish to see Christminster might be forwarded” (60)。日没の直前、祈りがかなえられたかのように、それまで視界をさえぎっていた霧が急に晴れ、雲間から日が差し、Judeが彼方遠くに見たのは——

Some way within the limits of the stretch of landscape, points of light like the topaz gleamed. The air increased in transparency with the lapse of minutes, till the topaz points showed themselves to be the vanes, windows, wet roof

slates, and other shining spots upon the spires, domes, freestone-work, and varied outlines that were faintly revealed. It was Christminster, unquestionably; either directly seen, or miraged in the peculiar atmosphere. (61)

ChristminsterはMarygreenの北東25km余りのところにある。そのような距離を衝いてここまで鮮明に見えるかほたいへん疑わしい。

Drusillaの言葉は幻覚の記憶のように呪縛する。そこから、JudeとSueは従兄妹どうしだから——特異な家系の生き残りとして同一の起源に溯る血を共有しているから——似ているのだ、という解釈が自然に呼び込まれることになる。だが、ゴシップの呪縛的な信憑性以外には真実たるを証明する根拠を持たないそうした解釈は、実は、それとは対照的に自然さを欠く別の根拠によって、テキストのなか所でそれとなく切り崩されている。その別の根拠——ゴシップとは別の方向から別の真実を語り、ある意味ではゴシップにはない堅固な権威に支えられた根拠——によれば、JudeとSueは従兄妹ではないのである。SueのいたMelchesterの教員養成学校の教師は、若い男(Jude)と一緒に出かけたきり一晩帰って来ないSueのスキャンダラスな行動に対して嚴重な処罰を与えるのだが、それに抗議する生徒たちに向かってこう言っている。

“I may as well tell you that it has been ascertained that the young man Bridehead stayed out with was not her cousin, for the very good reason that she has no such relative. We have written to Christminster to ascertain.” (195)

JudeとSueが従兄妹であるという証拠は、記録文書に関する限り存在しないのである。それとは別の根拠によって、読者は、二人が従兄妹であるのは自明のことに自然に思い込んでしまう一方で、上の一節はそのような読みを誘うゴシップの信憑性を密かに転覆している。*Tess of the d'Urbervilles*においては、Tringham牧師が記録文書を発掘して家系図上の「発見」に至ったことがヒロインの悲劇の端緒であり、テキスト全体を読み解くための重要な鍵の一つになっているわけだが、*Jude the Obscure*の場合も、家系を証する記録文書が読みの可能性の一つの中心を構成しているのだ。人々は、読者も含めて、SueとJudeは従兄妹だと信じて疑わない。しかし、Sueの学校が照会した記録文書のほうを有効な根拠と見なすならば、二人があれほどまでに似ているという印象を与えるのは何よりもまず従兄妹であるからだ、という判断には決定的

な誤りがあることになる。

もしも、Christminsterに保存されている家系を記録した文書をもって、JudeとSueの血縁関係を否定する十分な証拠と考えてよければ、読者は二人の宿命的とも言える結びつきをどう解釈すればいいのだろうか。一体どうして、二人の愛は、(自己の分身との交わりという意味で)近親相姦的關係に特有の情熱によって結ばれているように見えるのだろうか。こう考えてみよう。つまり、SueとJudeの關係についての二つの言説——Drusillaを中心とするゴシップの言説と、Christminsterの記録文書(書記言語)の言説——のあいだの落差は、それ自体が、同一性を同一性として(幻覚としてにせよそうでないにせよ)想定することを可能にする(前提的な)差異構造の一つの形態の微候的な現れとして捉えられるのではないか、と。例えば、近親相姦は、合法的な婚姻關係からの逸脱としてしかみずからを表象できないという意味で、法制度としての結婚から制限を受けているが、しかし同時に、そうして制限されるがゆえにこそ、特権的な侵犯として——人間を超えた存在のみに許された行為として——超越化/中心化される。これと同じ構造をSueとJudeの關係を規定する二つの言説のからみに見るならば、ゴシップの言説は、記録文書による反証という楔を打ち込まれることによって、息の根を止められるどころか、むしろそれによって逆説的にみずからを真理の言葉として超越化/中心化している、ということになる。いったん書記言語(letter)という楔を打ち込まれることで「殺される」という脱中心化の契機を経て、ゴシップの言説は真理を語る言葉として再中心化される、ということである。そして更に言えば、Judeの生涯そのものが、最後にはJudeじしんの死をもって、それまで中心から外されていたものの再中心化の瞬間を現出するという一大ドラマを体現している、と言えると思うのだが、その点については、本論の最後に結論としてそのあたりの問題に立ち返ったときに論じることにはしたい。その前に、Judeの生涯と運命において、古典研究への情熱と執念はどういう意味合いを持つのかという問題について、そして、実はそれと大いに関連しているのだが、「常に全体性を欠いた断片”(“a fraction always wanting its integer”)(427)として本性を巧みに晦ます存在としてのSueに翻弄されるJudeのセクシュアリティの揺れの問題について、考えてみたい。⁹⁾

JudeにとってSueは、一種自己の分身のような存在であると同時に、生涯理解することのできない遠い存在でもある。JudeにとってSueが謎めいた様相を帯びざるをえない理由の一つは、彼女はかつてある男(Christminsterの学

生で、卒業後ロンドンへ出て新聞の論説委員となった)と同棲していたという、Judeが彼女に出会う時点では既に過去のことになっているエピソードである。Sueはこの男から、本を借りるなどしていろいろと学んだが、彼が望んだ性関係だけは拒絶したという。SueはJudeにこのエピソードを、自分の過去の一節として語って聞かせるわけだが、私的な過去の闇から掘り起こされて新たな光の下で新たな意味合いを獲得するこのナラティブは、還元不可能な他者性をSueに付与する要の契機となる。Judeへ向けたこのナラティブをもってSueは、ただ単に過去のある出来事をそれ以上でも以下でもない一片の事実をとして伝えているのではない。このナラティブは、まずJudeの欲望に作用し、そこへ与える欲望をとおして解釈の対象となることによって、それを語るSueという女をJudeにとって不透明な存在にし、彼女を、彼の運命の鍵を握る読み解かれるべき謎として——自己の分身でありながら同時に自分の運命を外から決定する他者として——定位するという作用をしているのであり、JudeのSueへの視線の性質を規定していく重要な契機となっているのである。そこでJudeは、何故だか分からないがSueに翻弄されているという感覚に襲われるのである。

There was another long silence. He felt that she was treating him cruelly, though he could not quite say in what way. Her very helplessness seemed to make her so much stronger than he. (204)

Sueの話を聞くうちに、Judeの心理には不安の暗い影が射していく。同棲生活において性交渉はなかったのだと強調するSueの言葉を、Judeは決して疑っているわけではない。彼の動揺の根底にあるのは嫉妬ではない。そうではなくて、Sueがかつての男友達に対して距離を置いた無性的な態度を守り続けたのであれば、自分に対しても同じことをしかねないという恐れが、Judeを不安にするのだ。自分とかの大学生を重ね合わせるとき(それはもちろん重ね合わせて考えてしまうであろう——この男はSueを欲望したというだけでなく、Christminsterで学んだのである)、Sueがかつてあくまでも執拗に性的な関係を拒否し続けたということは、彼女のこの一貫性は望ましいものとして彼を安心させるのではなく、かえって彼の不安に火をつけることになるのである。このエピソードを聞いたおかげで、それ以後、SueがJudeに性的に距離を置こうとすると、Judeの頭にはかつてのSueの同棲相手の悲惨な運命のことが浮かんでくるようになる。

He looked away, for that epicene tenderness of hers was too harrowing. Was it that which had broken the heart of the poor leader-writer; and was he to be the next one? (208)

He leant back, and did not look at her for a long time. That episode in her past history of which she had told him — of the poor Christminster graduate whom she had handled thus, returned to Jude's mind; and he saw himself as a possible second in such a torturing destiny. (304-05)

しかも、JudeがSueに惹かれるのは、(Arabellaの動物的な性とは対照的な)彼女の無性的な魅力のためでもあり、彼にとってSueの無性は、耐えられない苦痛の種であると同時に、また望ましいものでもあるという二面性を備えている。JudeはSueのそういう魅力に惹かれている限り、彼女の拒絶に傷心して死んだこのかつてのSueの男友達の亡霊から逃れることはできない。してみれば、Judeを不安にさせるのは、単にSueが語るこの男の運命の悲惨さそのものというよりはむしろ、Sueの魅力が、いかに死者の亡霊を呼び起こす無気味なものであっても、なお彼の心を捉えて放さないという点であり、そうした魅力を発揮するSueという女の不可解さであることが分かる。そこでSueは、読み解かれるべき記号のようなものになる。

Jude looked round upon the arm-chair and its occupant, as if to read more carefully the creature he had given shelter to. (203)

無性的な友愛を持ち出すことがJudeの欲望を不安定な淵に追いやってしまうのと似て、悪魔払いの意味で過ぎ去った過去の出来事について語ることは、むしろ結果的に、過去を現在から切り離す、消し去ることのできない非連続性を敷衍することにしかならない。そこから、JudeとSueのあいだに、死者の亡霊が忍び込んで来る。Sueは、同棲生活のエピソードを語ることで、死者の亡霊の回帰する不透明な空間を生み出すことをしており、その死者の亡霊の回帰という事態がすなわち、過去の出来事の意味の全体を理解することは、遅れて来たJudeにはできないということの、いかんともしがたい証拠となってしまっているのだ。Sueとこの死んだ男との関係は、それが肉体的、精神的にどのようなものであったにしても、JudeがSueと知り合う以前の出来事であって、彼は、彼女の過去

を間接的に、断片というかたちで、受動的かつ事後的に受け止めることを余儀なくされる立場にある。それで Jude は、自分の愛する女の過去にまつわるこのエピソードには、何らかの自分の理解を越えた謎の意味が隠されているかのように感じざるをえない。この事態は、Sue が第三者としての亡霊の影を Jude とのあいだに呼び込んだことから生じる。Sue が自分の私的な、性的な過去について明かすとき、それはただ単に明かす行為ではない。彼女は、死者を過去の闇から蘇らせることによって、実は、過去を別の意味での闇に葬り去っているのである。Sue のナラティブは、明かすという所作をとおして、逆説的に、過去の出来事の意味を完全に把握することは不可能であることを示しているからである。回帰して来る死者の亡霊は、過去こそがこれからの Jude の運命の鍵を握っているのだということをほめめかす無気味な徴候なのだ。過去の意味がより明らかにされるためには、それがこれからの運命の展開に対して持つ意味が具体的に開示されるのを待たなければならない。過去の出来事の孕む意味合いは、いつかそれに遡及的に関連するような出来事が起こって初めて、事後的にのみ明かされる——ただしその場合でも、あくまでも断片的にであろうが。意味の未完了に Jude は苦しむ。Jude の予感 (“he saw himself as a possible second in such a tortuening destiny”) はやがて当たり、物語の結末で何らかの意味が開示されることになる。だが、それは、Jude じしんが過去となる瞬間でもある。

このような、考えようによっては別段 *Jude the Obscure* に限らず、過去の過去性をめぐる問題を扱った物語すべてに可能的には当てはまってしまふ一般論のように見える指摘——過去の出来事の意味は全体としては絶対に開示されえず、事後的に断片的なかたちで回復されるにすぎない——が、しかしながら、*Tess of the d'Urbervilles* や *The Well-Beloved* を書いた Hardy にあっては、必ずしも単なる一般論とは言えない、ある特定の方向へ解釈を誘いがちな問題として焦点化されてくる。死者の亡霊を呼び起こすことによって過去の意味を断片化してしまう Sue へ向けられた Jude の視線は、Hardy に特徴的な歴史と過去についての問題意識の下で、古典研究あるいは埋もれた過去の発掘と復元への情熱と奇妙なしかたで重なっており、意味の全体性あるいはまとまりを渴望する定方向的な視線として、独特な地位を得ているかに見えるのだ。意味の断片化、復元再生への情熱、そしてその限界への不安のとりとめのない混淆は、Christminster を係留点として、Jude にとって、Sue への欲望と学問への情熱を結びつけるパターンをなしている、という点に注意されたい。⁽⁴⁾

断片としてしか読み解かれえない Sue という女が Jude にとって持つ魅力の問題、そして、その誘惑の虜になることの意味が、彼がたどることになる運命によりどういふものとして開示されるのかという問題——これらを、古典への Jude の情熱や、非連続性の通時的認識形態としての歴史という問題との関連で捉え返すことは、Jude の少年時代からの熱烈な学究心の性質を解き明かす重要な手掛かりを提供する。

興味深いことだが、古典研究への情熱と Sue への情熱は、ただその対象認識において似たパターンを共有しているだけではない。Christminster を結節点として、二つの情熱は、その対象の位置においても重なっているのである。Jude が Christminster へ行くのは、大学だけが理由ではなく、Sue がそこにいるからでもある。また、Sue のかつての同棲相手は、Christminster の大学の世界に属していた者であって、その Christminster こそは、Jude がそこへ至ろうと独りこつこつと古典の勉強を続ける憧れの場所なのである。Jude にとっては、そうして、古典への情熱が、学問の中心である Christminster において、Sue のかつての同棲相手を媒体として、Sue への情熱と結びついている。その結果、Jude の二つの情熱をはっきりと分けることはできない。そこで、謎としての Sue、Sue の謎が学問への情熱に、Christminster に投影されるもする。だから、古典研究などとは全く縁のない世界に生きる Arabella との性的な関係と結婚が、Jude の学問への努力の足を引っばる慢性の病根のようなものとして、以後 Jude を Christminster への道程から遠ざけると同時に Sue との関係制限するようになるとき、Sue の語ったかつての同棲相手のエピソードは彼女の曖昧な他者性をいや増しに増幅し、彼を残酷なまでに翻弄するようになる。しかも実は、かの大学生の亡霊のような存在が Arabella の動物的な性の介在によって浮き彫りにされるという事情は、Jude が Sue にまだ出会っていない Marygreen 時代に受けたあるふとした印象によって、既に予兆されている。初めて Arabella とデートをして、「まるで昨日までの自分とは別人になったような気持ちで」(92) 家に帰って来たとき、Jude を待っていたものは——

When he got back to the house his aunt had gone to bed, and a general consciousness of his neglect seemed written on the surface of all things confronting him. He went upstairs without a light, and the dim interior of his room accosted him with sad inquiry. There lay his book open, just as he had left it, and the capital letters on the title-page

regarded him with fixed reproach in the grey starlight, like the unclosed eyes of a dead man:

H KAINH ΔΙΑΘΗΚΗ (92)

「死んだ男の見開かれた眼のように」とは、後々 Jude が Sue から同棲生活のエピソードを聞いて感じる不安から溯って考えるならば、Sue の性を欠いた冷たさに心破れて苦しみ、死んでいったかの大学生の死の奈落からの視線のように、と読むことができるのではないか。Jude は、後に Sue からこの男のことを聞くときに不安に襲われるような感性を、Marygreen 時代から既に備え持っていた、と言えるのではないか。不安に敏感なそういう Jude が Arabella の誘惑に身をまかせるとき、「死」の奈落が、その無気味に虚ろな口をぱっくりと開くのである。Jude はそうした「死」に憑かれており、彼のセクシュアリティはその無気味な徴を初めから刻印されているのだ。Jude が Sue に見ざるをえない他者性には、だから、死の香りがする。

Sue への情熱が、彼女を曖昧な断片としてではなく、一つのまとまった全体として理解することに賭けるものとすれば、古典への情熱は、自分の存在など必要としていないかに見える現実世界の不条理 (Little Father Time の行為が後に浮き彫りにする) から脱出し、そこから隔たった過去の世界に人生の充実を見いだす夢への賭けである。遙か隔たった古典世界に充実した意味を見いだそうとすると、Jude は、過去の意味はそのままのかたちで回復、理解することができるに違いないという幻想に支配されている。まず遠く隔たった過去に充実した意味の存在を想定し、しかもそれをそのまま完全に現在に移植することが可能である、と信じているのだ。まず自律した意味の存在が解釈行為に先行して想定されているため、現在と古典世界のあいだの時間的隔たりは、意味が解釈行為において完全なかたちで把握されるのを阻害することはない、ということになる。つまり、歴史の歴史性が脱落している。Jude の古典の勉強への情熱を支えているのは、憧れの対象の意味は、正しく解釈しさえすれば完全なかたちで目の前に立ち現れるはずだという、意味の同一性を前提とし歴史性の脱落した幻想なのである。彼が少年時代に Christminster の町を遠くに見やるその眼差しには、そういう幻想が、無垢なかたちではっきりと表れている。

He had heard that breezes travelled at the rate of ten miles an hour, and the fact now came into his mind. He parted his lips as he faced the north-east, and drew in the wind as if it were a sweet liquor.

"You," he said, addressing the breeze caressingly, "were in Christminster city between one and two hours ago, floating along the streets, pulling round the weather-cocks, touching Mr Phillotson's face, being breathed by him; and now you are here, breathed by me—you, the very same."

Suddenly there came along this wind something towards him—a message from the place—from some soul residing there, it seemed. Surely it was the sound of bells, the voice of the city, faint and musical, calling to him, "We are happy here!" (63)

夢見心地で吸い込む風は、Jude にとっては、ほんのちょっと前に Christminster の町を吹き抜けたまさにその同じ風 ("the very same") なのだ。ここで Christminster は、風が吹けば町の空気を外にいてそのまま感じることができる、そんな開かれた場所として見つめられている。しかも、Christminster から Jude が受け取る「メッセージ」は、至福の響きを持つ鐘の音ではあっても、そこには死の香りは感じられない。ゴシップの言説によって結ばれた従兄妹どうしの関係に、記録文書という「殺す」ものとしての言葉 (letter) による別のメッセージをもってして楔を打ち込む潜在的な力を Christminster は持っているという可能性が、ここではまだ Jude には見えていない。結局、物語の終わりで Christminster は、Jude じしんの死——途切れ、非連続としての死——の場所となることで、その容赦のなさを最終的に示すわけだが、そこへ至るまでの Jude の生涯の道程は、一時の夢を見させてくれた少年時代のこの幻想、夢が破れていく過程である。ここでの Jude の Christminster への無垢な憧憬は、結末から振り返って見ると、切実さを感じさせるものではある。

Jude は、実際に古典の勉強を始めるまでは、同じような意味の同一性の幻想を古典語の習得についても抱いていた。その幻想が崩れ去るのは、Christminster にいる Phillotson に古典語の教科書を送ってもらい、そのページを繰ってみたときである。彼はそれまでは、習得すべき言語の文法さえマスターしてしまえば、そこに内在する法則に従って、後は自動的に自分の母語からその言語へ翻訳ができるものと思っていたのだが——

He learnt for the first time that there was no law of transmutation, as in his innocence he had supposed (there was, in some degree, but the grammarian did not recognize it), but that every word in both Latin and Greek

was to be individually committed to memory at the cost of years of plodding. (71)

同一的な意味がまず先在し、そこから個々の単語が派生するのではなく、個々の単語の意味はまず本質的に断片的であるというこの認識は、後に Jude を苦悩に陥れる、Sue という女はまるで「常に全体性を欠いた断片」のようだ、というあの思いの伏線となっている。Jude が Sue に翻弄されるさまは、彼が言葉の意味の断片性に直面して感じる幻滅と類似している。例えば Sue は、Phyllotson と結婚して Shaston に移った頃、会いに来た Jude を、夫ある身としての立場から距離を置いて冷たく追い返しなが、その直後に自分の冷たさを詫げる手紙を書いて、「私を愛したければ愛したって構わない」(210)と誘いをかけるようなことを言うなど、一貫性を欠いた言動でもって Jude の不安定に揺さぶりをかける。確かに、Sue の Jude への態度は、その都度その都度断片的である。まるで、Jude に対して一貫した気持ちなど持っていないかのようである。一方 Jude にとっては、Sue の断片的な態度は、一つの気持ちの引き裂かれた断片の表現というようなものではありえない。Sue の態度が断片的だというのは、そういう意味においてではない。そうではなくて、彼女の態度は、その都度その都度彼女の Jude への本当の気持ちを完全に余すところなく物語っているように見えるからこそ、断片的だと言えるのである。非連続性(discontinuity)は Sue のヒステリックな性格の特徴だが、彼女は手紙を書くことで、効果的にみずからを、全体に還元不可能な非連続性の所産としての断片として、脱中心化しているのだと言える。⁶⁾ Sue がそうして Jude に宛てて書く手紙(letter)は「死」の言葉なのであり、実際 Jude は、予期したとおりにかの大学生と同じ運命をたどって、最後には独り死ぬ羽目になるのである。

Jude は、少年時代に浸った意味の同一性の幻想から、生涯解き放たれることはなかったと言っていい。彼の古典への情熱、Christminster への憧憬——そしてこれらと転位関係にある Sue への情熱——は、そういう幻想に支えられていたのだから。また、Jude は死ぬまでゴシップの言説に幻惑され、Sue を自分の従妹として、自分の分身のような存在として見つめていたに違いないという事情は、彼がいかに意味の同一性の幻想を抱かされ、その結果、記録文書＝「死」の言葉を抑圧したかを物語っている。二人で一つの全体を構成するような Sue と Jude の愛の中心をなしている従兄妹としての血の繋がりは、ゴシップの言説が浸透させる神話的真実以上のものではないのであり、

それは、記録文書という断つものとしての歴史の言葉＝「死」の言葉によって(あるいは換喩的に、Jude の死をもって歴史化されるこの小説のテキストによって)常に潜在的に切り崩されているわけだが、Jude には歴史の言葉がついに見えないのである。Jude の人生において、家系についての記録文書など存在しないに等しいということは、ゴシップの言説の呪縛を被ることと同義である。Jude にとっては、意味の幻想に浸ることは、すなわち、存在を非連続として規定する「死」の言葉の抑圧と同義である、ということである。

そうして Jude が抑圧する「死」の言葉が象徴する非連続性の存在様式は、更に、セクシュアリティにおいて興味深いかたちで表象されている。この小説においては、セクシュアリティ全体に暗い死の影が射している。豊饒の象徴として生産的な安定を獲得することはなく、むしろ病的畸形的な不毛の香りを漂わせている。例えば、父親と言ってもおかしくない年齢の夫との性交渉を過敏に忌避する若妻や、年不相応に老け込んだ少年——これらは、その性の病理性や年齢的な変則性からして、生殖と成長の過程における自然な結合と連続性の欠如を示していると言えよう。Jude the Obscure における異形のセクシュアリティを特徴づけるのは、元来繋がっているべきものが構造的に切れており、しかも、徴候としての連続性の喪失それ自体が一種の記号としての地位を獲得するという、ある独特の非連続の存在様式である。Arabella が Jude に投げつける雄豚の切り落とされた性器は、それこそまさに切断された生命の豊饒の象徴であり(I.vi)、あるいはまた、彼女が自分の胸で温めているコーチンの卵も、暴力的に中断された自然の生殖のプロセスの象徴と解すれば、同じ意味合いを持っているように読めるであろう(I.viii)。ここで注目すべきは、どちらの場合も、生殖の豊饒の切断そのものが性的な誘惑の手段として用いられているという事実である。もともと繋がっているべきものが、切断されることによって誘惑の道具となり、誘惑の行為において独特な意味を付与されている。豚の性器に特別な意味があるわけではない(Arabella の動物的な性を示唆する以外には。)意味があるのは、それが切り落とされていること、生殖を意味しながら(signify)生殖が実際にはそこからは起こりえないこと、一言で言えばその非連続性なのである。特に、性を強力に示唆しながら、欲望を呼び込みながら、つまり誘惑しながら、行為としての性は「残酷に」排除されている点に注意されたい。Sue を思い起こしてみると、彼女の無性性が Jude にとって性的な魅力となると言う場合にも、同じようなことが起こっているこ

とに気がつくであろう。つまり、Sueは、(女としての)性的同一性から切れることで、かえって、特徴的に性的な、Judeにとって残酷な記号になっているということである。あるいは、SueがJudeに書き送る手紙はひょっとしてArabellaがJudeに投げつけるものと、少なくともこの点(非連続性)で似てはいはしないだろうか。Judeは、Arabellaの肉体的な誘惑に溺れていくことで初めて女を知るようになるわけだから、彼の性経験はその一番初めのきっかけからして、非連続性を刻印されたセクシュアリティに始まったわけである。つまり、Judeにとってセクシュアリティは、そもそもの始まりから、「死」の存在様式によって規定されているのである。

歴史とセクシュアリティは、この小説においては、構造的に類似している。セクシュアリティの観点からJudeにとってSueがいかなる存在であるのかという問題を考えるときには、非連続性の象徴としての「死」の言葉(letter)——人格を脱中心化し、情熱、肉体関係と呼び込みつつ断つ手紙の言葉、血縁関係を断ち切る歴史の言葉——が二人の関係において果たしている役割を考えなければならない。ほとんど二人で一つのまとまった全体を構成すると言われるほどに一心同体のSueとJudeのあいだに、いかんともしがたい他者性の影を忍ばせて、無言の脅威となっている「死」の言葉は、一体Judeのセクシュアリティをどのように揺さぶり、彼の生涯の運命をどのように左右しているのだろうか。生殖の豊饒の切断としての非連続性は、[性器の切断→不毛→家系の途切れ→連続性の喪失としての歴史]という連鎖の下で読まれるはずだが、Sueという女の存在がJudeにとって底無し他者性を孕みうるのは、まさに彼女のセクシュアリティもそういう連鎖を貫通する非連続性を刻印されているからにほかならない。そう考えてみると、一見無関係に見える、Judeを死にまで追いやるSueの異形のセクシュアリティの魔力と、Melchesterの教員養成学校の教師がSueの親族関係について得た情報とが、小説全体の構造の中で興味深い結びつきを持っていることが分かってくる。Sueの人格を特徴づける内的な一貫性のなさ、つまりその全体としての理解を許さないとりとめのない非連続性は、構造的に言って、歴史の非連続性と相同関係にある。どちらも、「死」の言葉の脅威をもって、Judeの生涯の悲劇の性質を根底的に規定しているのである。

既に見てきたとおり、SueのセクシュアリティはJudeにとって、非連続性の不均衡——内的一貫性の欠如から結果する主体の統一の不可能性としての不均衡——を孕んだ、死の予感を仄かに漂わせる不透明な誘惑として謎め

いて立ち現れてくるわけだが、そこに潜む根源的な不均衡としての他者性は、ただJudeを残酷に翻弄して死に導くだけの破壊的な外力なのではない。Judeを翻弄する他者性とは、たとえそれがSueに定位されるにせよ、ただ単に彼の生命を外部から脅かすような、目に見える脅威ではないのである。それは実は部分的には彼じしんの内面に淵源するものでもあるのだが(不安)、幻想に浸ることでその認識は抑圧されているのだと言える。ところが、結末、彼が心破れてとうとう命を落とすに至って、彼を翻弄し続けてきたセクシュアリティの他者性は、明確なかたちで、彼じしんの内部から彼じしんの死の場面において、彼じしんの死として、徴候化される。言い換えるなら、Judeは命を落とすそのとき、内面から不均衡の流れとして噴出する他者性を「生きる」。つまり、みずからが、「死」を「生きる」のである。Judeの死は、生と死の非対称性を具現する。ここで、セクシュアリティが孕む他者性は、Judeの死の意味を、ラディカルに内部から規定していると言えるのではないか。彼の死は、生の切断——途切れ、非連続——の現象として、抑圧されていたものの回帰の具現となっているわけだから。

Judeは死をもって、生涯彼を苦しめたセクシュアリティの捉えどころのない誘惑、常に不安を呼ぶ誘惑、不安を呼ぶがゆえに誘惑する誘惑から解放されるのであろうか。確かに死は、終わりという意味で、一種の解放であるのかもしれない。だが、Judeの死は、それ自身が他者性そのものの解放(=他者性の脅威の実現)なのであって、それゆえに、何よりもまずそれは不可能な解放、ありえない解放だと言うべきである。例えば、Judeは常々、自分はSueの性的な冷たさに絶望してかの大学生の二の舞いになってしまうのではないか、という不安を抱いていたわけだが、Judeの死は、この男の亡霊の呪縛からの解放であるどころか、その逆で、その不安の実現となっている。侵食する不安の内に彼の生涯を包み込んでいた暗く蠱惑的なセクシュアリティは、その終わることのない脱中心化、切断の脅威の証しとして、Judeの死を実現するのである。Judeの死は、彼をたぶらかし苦しめたセクシュアリティの終焉では決してありえず、むしろそれ自身がこの悲劇の物語のセクシュアリティの表象の一部なのだ。

Judeの死は、まず第一に、非連続性の存在様式の徴候化として理解されなければならない。Arabellaの雄豚の性器が、元来あるべき場所から切り離されることによって一種の記号となり、ラディカルな断絶としての「死」の香りを性的な誘惑の中心から放つと同様に、Judeの死は、それまで続いてきたものの途切れとしてまず捉えられる

べきであり、そのように位置づけられるならば、それは、生の充実——連続性——という偶然の出来事(いずれは歴史に包摂されてしまう偶然の出来事、あるいは断片)がそれとの対照関係においてしか定位されえないような根源的な非連続性の存在様式の究極の具現として、彼の薄幸であった生涯において絶え間なく予徴されていた「死」への不安——単なる生物学的な死への不安というのではなしに、非連続性の存在様式、あるいは歴史にみずからが呑みこまれてしまうことへの不安——の意味を、遡及的に照射していることが分かるはずである。例えば、Sueのかつての同棲相手の死の意味を遡及的に照射している、という具合に。Judeは、この男の亡霊の正体を明かすのに、みずからの死を待たなければならなかった。Judeの死は、彼が生涯恐れていたものの正体に事後的に光を投げかけることを可能にしている。それはそれが、彼が恐れていたもののラディカルに直接的な実現であるという意味においてにはかならない。ラディカルに直接的な——とは、Judeの死において、抑圧されていたものはただ単に象徴的な徴候として回帰して来るのではなく、抑圧する主体そのものの死というかたちで過剰に回帰してしまう——回帰し過ぎてしまう——、という意味である。そしてそのとき、非連続性を指示する象徴的な「死」は、根源的な不均衡の非方向的な盲目の過剰としてその象徴性の殻を破って噴出し、その際に一瞬、その不均衡の氾濫が、象徴としての「死」そのものの死の幻を現出させる。

Judeの死は、象徴的な「死」の犠牲である以上に、象徴的な「死」そのものが死んでいく瞬間の具現である。物語の結末で、Judeとともに死んでいくものがある。

An occasional word, as from someone making a speech, floated from the open windows of the Theatre across to this quiet corner, at which there seemed to be a smile of some sort upon the marble features of Jude; while the old, superseded, Delphin editions of Virgil and Horace, and the dog-eared Greek Testament on the neighbouring shelf, and the few other volumes of the sort that he had not parted with, roughened with stone-dust where he had been in the habit of catching them up for a few minutes between his labours, seemed to pale to a sickly cast at the sounds. The bells struck out joyously; and their reverberations travelled round the bedroom. (490)

部屋中に響き渡る鐘の音の中で、Judeがこれまで手放すことのなかったギリシア語、ラテン語の書物が死を迎え

る。Judeを死に追いやった「死」の言葉(letter)は、彼とともに息絶えるのである。ここでは、死は単に象徴的なものではありえない。象徴的なものとしての「死」は、みずからの過剰性の内に非徴候的に韜晦し、その過剰自体が別の幻を現出している。「死」の言葉がこうして息絶えたJudeの死の床において、それまでそれによって脱中心化されていたものが再中心化される、そんな幻だ。それは、鳴り響く鐘の音がJudeの屍を包むように、「死」を沈黙の内に象徴するものの青ざめていく屍のただ中から沸き起こり、過剰な光輝の中で「死」の影を霧散させる。

この幻は、安定した基底をなす中心への憧れ、あるいは自律した意味がすべてに先行して存在するという幻想が生み出すものとは、仮に似て見えることがあるとしても、全く異なるものだ。例えば、そうした幻想においては抑圧され排除されていたものが、ここでは、みずからの盲目的過剰に押し流されて反構造的な直接性の氾濫=逆流をきたしている、という違いを考えてみるだけでいい。Judeが少年時代に遠望した Christminsterは、夕日に光り輝く幻として、美しい理想郷として捉えられたわけだが、それは、遠くにあつて憧れの対象となり、そこへの情熱の転移が何よりもまずその存在証明となるような、遁走する焦点として定位されていた。ちょうど、現実世界のつらい矛盾から逃れて、遠い過去の古典世界に充実を求めるときに、時代の隔たりそのものが憧憬の条件をなしているのと同じことで、学問の中心としての Christminsterへの憧憬は、かの地からの距離によってまず可能になっている。そして、そうした憧れの対象としての Christminsterは、閉じた中心として想定されている。それとは対照的に、Judeの死が現出する幻においては、中心は、直接周辺のもので大気のごとくに包み込んでしまうという意味で、開かれている。ここでは、過剰性の具現である鐘の音は陽気に響き渡り、その響きの中にいる者は、もう既に中心にいるのだ。鐘の音がJudeを包む。確かにJudeは大学の壁を越えることはなかった。息絶える今も壁の外にいる。だが鐘の音の中で一瞬、壁はJudeの書物とともに色あせ、消え去る。Judeは、壁の外にいながらそこにたどり着いたかのようだ。だが、これはすべて幻である。Judeの死を看取る読者が見る幻である。かつて、少年Judeが見た Christminsterの幻と似てはいるが、別の幻。だが、それを一瞬より長く見つめ続けると、読者はJudeの少年時代に引き戻され、少年Judeと同じく「幻覚のようなものを見る悪い癖」に陥るかもしれない。⁶⁹

Judeは生涯、Christminsterに憧れを抱き続けてきたが、その憧れは、そこに表象されている非連続性への不安と

表裏一体をなしていた。つまり、そうした憧れは、中心の内部に「死」の裂け目を既に刻み込まれたものとして定位することを意味し、その意味で、そうして想定された中心は、「死」の言葉の介在によって常に脱中心化されてしまうような、一つの不可能性としてしかありえない中心であった。「死」の言葉の介在による脱中心化は、夢の実現を阻むべく外部から来る障害であるどころか、むしろ、憧れの定方向的な情熱がそもそもそこを出発点としてしかありえない、欠くことのできない条件なのである。つまり、Judeの生涯は、憧れの対象の不可避的な脱中心性によって規定されていた、とすることができる。Judeの死が実現しているドラマ——「死」の絶対的な過剰が、還元不可能な他者性としての「死」の言葉が脱中心化していたものを再中心化する——は、ただし、そういう脱中心化の単なる鏡像的な反転ではありえない。「死」そのものの死としてのJudeの死は、「死」の言葉の介在による脱中心性をその内部から切り崩して死に至らしめ、その結果みずからの過剰の中で、すべてを直接性の氾濫の内に包容するような開かれた中心の幻を、今は息絶えた不在としての中心——憧憬の対象としての中心——の屍の彼方に現出している。その意味で、再中心化されたChristminsterは、かつての憧れの対象としてのChristminsterの対称的な反転像であるというよりはむしろ、それを見つめていた定方向的な視線そのものの解体において起こるラディカルな崩壊として捉えられるべきである。閉鎖的な排除から内発的な過剰へ、というChristminsterの中心性の様相の転換は、中心への幻想から既に開かれた(崩壊としての)中心による包容へ、という転換として解釈できるはずである。

「死」の言葉の死によって再中心化が実現するという事態は、Christminsterという地理上の焦点をめぐってのほかにも、ゴシップの言説の地位についても言える。JudeとSueを従兄妹だとするゴシップの言説が、家系の記録に照会した証拠という「死」の言葉の楔を打ち込まれながらも、人々を自然な信憑性をもって包み込む(Drusillaのおしゃべりのように)途切れのない流れとして生き延びるのは、それが、徴候的に「死」の切断を被りながらも、「死」の言葉がみずからの過剰の内に自壊する(Judeの死が劇化するような)瞬間を衝いて、過剰性の効果の幻として神話化されるからだ、とすることはできまいか。SueとJudeの血縁関係についてのゴシップがほとんど神話的と言える信憑性と浸透力を獲得するのは、無言の反証としての「死」の言葉によっていったん象徴的なしかたで「殺される」/脱中心化されることをとおして、逆に「死」の言葉

が過剰による自壊に至るに至って、結果的にみずからを強力で再中心化しているからだ、と言えるのではなからうか。確かにいったんは、ゴシップの言説は致命的な切断を被るのである。しかし、たとえゴシップの被るそういう死が象徴的には死であるにしても、「死」の言葉が自壊する瞬間にゴシップの死は単に象徴的なものではありえなくなり、構造的な均衡としての象徴性が崩壊するところでゴシップの言説は過剰の効果として復権する。ゴシップの言説は、書記言語が過剰をきたして自壊するときの音声言語の言わば幻聴として特権化され、真理を語る神話的な言説として、歴史の合間をぬって生き延びていくことになるのである。それは記憶された声に似ている。歴史はいずれは断片としての生を呑みこんでいく。出来事はすべて記憶と化していく。書かれた言葉は話された言葉を「殺し」ていく。だが、生は死に屈するたびに、その瞬間に、鐘の音を響かせもする。憧れの何たるかを知る者は必ずそのとき、Sueの声を聴くはずである。

Sueが「死」の言葉(letter)に屈し、離れて行ってしまったために、Judeは絶望に陥り、長くはなかった生涯を閉じる。確かに、暗く悲惨な結末ではある。だが、ほかならぬ彼の死をもって、生涯彼を翻弄し続け、報われぬ情熱に縛りつけてきたものも死を迎えたのである。Judeは、確かに、Sueとの幸せな一体化を手に入れることはできず、死という永遠の別離の運命をたどる羽目になった。しかし、二人は従兄妹ではないとする記録文書上の証拠が、ある意味では無力であるとすれば、あるいは彼の死は、二人が一心同体になるのを阻むものではないかもしれない。結局、人々の語るところによれば、二人は奇妙に一心同体なのだ。Judeの死の床の傍らで鐘の音に包まれて書物が色あせていくのと同じように、ゴシップの言説の充溢の前で記録文書という「死」の言葉は緩慢な死を迎え、人々が共有するゴシップが真理を語る声となる。死の床で、響き渡る鐘の音の中に、Judeがその声を聞いていないと言えるかどうか。そうでなかったら、その既に血のかよっていない顔に浮かんでいるかに見える微笑は、一体何を意味しているというのか。

註

- (1) 使用したテキストは、*Jude the Obscure*, ed. C. H. Sisson (Harmondsworth: Penguin, 1978)。以下引用のページ数はこの版による。
- (2) テキストに顕現する視点の観点からは、Sueと

Judeの関係は非対称である。テキストの視点はJudeに近く、Sueはそこから一定の距離をおいて捉えられている。この点については、Elizabeth Langland, "A Perspective of One's Own: Thomas Hardy and the Elusive Sue Bridehead," *Studies in the Novel* 12 (Spring 1980), pp. 12-28を参照。また、同じ前提に基づき、SueをJudeの自己実現の媒体と論じる同著者の、"Becoming a Man in *Jude the Obscure*," in *The Sense of Sex: Feminist Perspective on Hardy*, Margaret R. Higonnet, ed., University of Illinois Press, 1993, pp.32-48も参照。JudeにとってSueは何者なのか、Judeの視点からしてSueはどう定位されるのかという問いは、既にテキストに組み込まれている。

- (3) Sueの見たとところの一貫性の欠如をどう読むかという問いは、Sueという人物を(例えば時代背景に照らして)どう読むかという問いを呼ぶ。だが、Langlandの論考が例示するように、*Jude the Obscure*のテキストは、ジェンダー、心理分析、時代背景等の諸問題を、見落とすのではなく、括弧に入れて読むことを要件としているように思われる。そのこと自体を「政治化」したくなる向きもあろうが、そこにはテキストの個別性/特殊性を不当に矮小化する危険がある。特にこの*Jude the Obscure*というテキストは、イデオロギー批評には還元されえないラディカルな特殊性を持っているという論を打ち出す、John Goodeの優れた論文を参照されたい。John Goode, "Sue Bridehead and the New Woman," in *Collected Essays of John Goode*, ed., Charles Swann, Keele University Press, 1995, 171-183。Sueに関してはGoodeは、Langlandと基本的には同種の見方で、Judeの経験における関数("function")と捉える。
- (4) この点に関しては、Ramón Saldívarの論文から示唆されるところがあった。Saldívarは、Judeの欲望が[Phillotson → Christminster → Sue]へと転位していく基底には、秩序の源泉となるような安定した中心への欲望が常にあることを見抜いている。Ramón Saldívar, "*Jude the Obscure*: Reading and the Spirit of the Law," *ELH* 50 (1983), pp. 607-625.
- (5) SueがJudeに書く手紙に関して、手紙と情熱の関係、不在の誘惑と現前の幻想の交差点で「約束」するものとして媒介する手紙といった問題に、Saldívarは洞察をもって言及している。Saldívar, pp.

613-14.

- (6) 読者がJudeの幻覚を見る悪い癖を繰り返すことの必然性をSaldívarは指摘している。このテキストは、幻想から目覚めぬ結果の悲劇を説きつつも、同時に、幻想を見ることの必然性、Judeじしんは気づかずに死んでいく「否定的真理」を遂行するものである、とSaldívarは論じる。何故ならば、
 "...language itself, to the extent that it attempts to be truthful, necessarily misleads us about its own ability to take us outside its own structures in search of meaning."
 (Saldívar, p. 619)